

Title	エリクソンの発達論に関する一考察：その基本的視座について
Sub Title	A study of Erikson's development theory : in relation to his fundamental viewpoint
Author	河野, 真佐子(Kohno, Masako)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1984
Jtitle	哲學 No.79 (1984. 12) ,p.167- 187
JaLC DOI	
Abstract	This paper is a study of the fundamental viewpoints on Enkson's development theory. It is considered as follows : (1) The development of personality follows " inner laws of development" which is genetically innate to each person. It also follows "the epigenetic principle", that is, the principle of physical development. (2) Erikson puts the most importance on the reciprocity between a person and his environments in his theory. In this reciprocity, the environments should be guided by both the instinctive and the traditional patterns. (3) The components of healthy personality are considered eight pairs. Each pair is differentiated through time and when it becomes "phase-specific" (See the "chart"), it should find its lasting solution, through which the ego's essential strength is created. (4) Erikson assumes that the lasting solution of each pair is determined on the following three points indicated in the "worksheet". (1) What kind of environments a person interacts with (Radius of Significant Relations) (2) What sort of interactions he experiences (Psychosocial Modalities) (3) From the standpoint of Freud's psychosexual development, what part of the body zone takes the important role in the interactions (Psychosexual Stages) In conclusion, it is important to bear in mind that, according to Erikson's development theory, the growth of healthy personality presupposes the trustfulness in a healthy society.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000079-0167

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

エリクソンの発達理論に関する一考察

——その基本的視座について——

河 野 真 佐 子

A Study of Erikson's Development Theory: In Relation to his Fundamental Viewpoint.

Masako Kohno

This paper is a study of the fundamental viewpoints on Erikson's development theory. It is considered as follows:

(1) The development of personality follows "inner laws of development" which is genetically innate to each person. It also follows "the epigenetic principle", that is, the principle of physical development.

(2) Erikson puts the most importance on the reciprocity between a person and his environments in his theory. In this reciprocity, the environments should be guided by both the instinctive and the traditional patterns.

(3) The components of healthy personality are considered eight pairs. Each pair is differentiated through time and when it becomes "phase-specific" (See the "chart"), it should find its lasting solution, through which the ego's essential strength is created.

(4) Erikson assumes that the lasting solution of each pair is determined on the following three points indicated in the "worksheet".

- ① What kind of environments a person interacts with
(Radius of Significant Relations)
- ② What sort of interactions he experiences
(Psychosocial Modalities)
- ③ From the standpoint of Freud's psychosexual development, what part of the body zone takes the important role in the interactions
(Psychosexual Stages)

In conclusion, it is important to bear in mind that, according to Erikson's development theory, the growth of healthy personality presupposes the trustfulness in a healthy society.

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科博士課程 (教育学専攻)

問題の所在

E. H. エリクソンは、精神分析の正統派の一潮流である「自我心理学」の代表的人物である。彼は1902年フランクフルトに生まれ、19歳から25歳にかけて芸術家として中央ヨーロッパを放浪した後、ウィーンで精神分析研究所で実際に A. フロイト から分析を受けながら精神分析理論を学んだ。その後アメリカに移住し、ボストンでの児童臨床の仕事を皮切りに、青年期を中心とする人間の発達段階・ライフサイクルの研究や子どもの遊びの構造、児童発達に関する継続的な文化人類学的研究などを数多く発表してきた。特に彼の「アイデンティティ・自我同一性 identity」や「モラトリウム moratorium」といった言葉は、現代の青年期を語る際のもっとも重要な用語の一つとなったが、日本においては一種の流行語として社会に広まった感さえある。また人間の精神的健康の発達をライフサイクルとして漸成的にとらえた彼の「図表 chart」も、アイデンティティ同様有名なものとなった。しかしながら、このようなエリクソンの「アイデンティティ」、「図表」、「ライフサイクル」といった用語の顕著さやこれらをめぐる論議の華やかさとは裏腹に、これらの基底にあると思われる人間の発達に関するエリクソンの根本的な考え方についての考察が今まで十分になされてこなかったのではないと思われる。日本におけるエリクソンの代表的研究者の一人である鑑幹八郎氏はその論文の中で、「エリクソンの理論体系を徹底して理解していくこと」の重要性を指摘され、またエリクソン自身もその著書「自我同一性 Identity and the Life Cycle」の中で「図表」に関して次のように述べ、この「図表」を安易に理解しないよう読者に対して注意を促している。「このような図表は、これを一応用いて『そして』棄て去ることも自由にできるような人々がまじめな注意を向ける場合にだけおすす⁽¹⁾めしたいと思う。」

この小論は、一つの言葉にも様々なニュアンスがこめられ、しかも人類

学から歴史学にまでその洞察が及ぶエリクソンを少しでもよりよく理解する為の一試論として、まずエリクソンの人間の発達に関する基本的視座について、特に彼が乳児期について述べていることを中心として考察する。

I. 内的法則に従う生体としての人間

まずエリクソンの発達理論における基本的視座の一つは、彼が生体としての人間に生来備わっている「発達の内的法則 inner laws of development」とよぶものを重視している事である。この「内的法則」という言葉は、「生体としての人間の準備態勢 readiness⁽³⁾」また「彼を世話する人々との有意義な相互作用に対する一連の潜在能力 a succession of potentialities for significant interaction with those who tend him⁽⁴⁾」を意味し、種としての人間に遺伝的に組み込まれているものである。そして人間の健康な精神の発達は、この内的法則の展開によって予め予定されている乳児期、幼児期、児童期、青年期などの各発達段階にそって発達していく⁽⁵⁾とエリクソンは考えるのである。この内的法則に導かれた新生児の行動パターンについて、ロチエスター医科歯科大学の精神医学教授でありエリクソンらの精神分析的自我心理学の立場に近いG. L. エンジェル教授の言葉⁽⁶⁾が参考になると思われるので、少し長いが次に引用する。(この中で“内因性の”行動パターンを表出させるものこそ、エリクソンのいう人間が生来的に有している内的法則に他ならないと考えられる。)

「動物、特に新生児の行動を観察すると、“先天的”(innate)あるいは“内因性”の(endogenous)行動パターンという概念の妥当性を納得することができる。そしてこれらの行動パターンは、(1)その種族のすべての成員(またはその種族の同性の成員)が特定の発達段階に、特定の状況の下で頭わし、(2)その種族の他の成員からの教育も、外部から与えられる報酬や罰によって先行する条件づけも必要としない⁽⁷⁾。このような“内因性”の行動パターンは自ら分化(self-differentiating)してゆくが、同時にそれは

次のことを意味している。すなわち、それは環境が個体の発達を可能ならしめ、その行動パターンの喚起に必要な刺激（たとえば“栄養”）を与える限りは、各個体の正常な発達の一部として現われるようになる、という意味である。“内因性の”行動パターンが存在するから、生存、成長、発達に必要な身体的欲求の満足を得るために必要な環境との適合が可能になる。動物が成長するにつれて、さらに進んだ内因性の行動が次々に現われてくる。つまり、それはまず動物がしだいに自足（self-supporting）できるようにして、さらに成長した後には求愛、出産、育児にたずさわりうるようにする。このような行動パターンが比較的秩序正しい順序で発達するという事実は、一定の先天的な発達過程が時間的に決定されているか、または一定の発達過程が現われるためには、それに先行する一定の段階を必要とすることを示している。……食物摂取、歩行、性的行動などの行動パターンは、本質的には類似しており、各種族内では本質的には同一順序で発達する。このような発達は、神経系内の特定の体制の成熟(maturation)に対応しているにちがいない。⁽⁸⁾」

このエンジェル博士のいう“内因性の”行動パターンこそ、その種に共通する精神的発達を促すものだと考えられるが、エリクソンはこのことを、「人間の精神的発達は その内的法則に従って発達していく」ととらえていると思われるのである。そしてこのエリクソンの「内的法則」という考え方の基礎には、生体としての人間である以上、その精神的発達は神経系や筋肉系の成熟という身体的発達と密接に関連しながら発達するという前提が存在しているのである。そしてその際精神的発達の過程は、「漸成原理 epigenetic principle」⁽⁹⁾という原理に基づいて展開していくと考えられるのであるが、この「漸成原理」についてエリクソンは次のように定義している。つまり「成長するものはすべて『予定表』(ground plan)をもっていて、この予定表から各部分(parts)が発生し、その各部分はそれぞれの成長が特に優勢となる時期をもち、そして最終的にこれらすべての部分

は一つの機能的全体 (a functional whole) を生み出す⁽¹⁰⁾」というものである。これは各部分が各々固有の発達を遂げていくにもかかわらず互いに密接に関連し合っていて、最終的にはそれらすべての機能が全体として統合されていくことを意味しているが、エリクソンはこのような発達様態は、人間の身体の発達、特に「胎児の諸器官は一步一步成長する⁽¹¹⁾」という人間の子宮内における胎児期の生理学的発達にその基礎をもっていると考えている。この子宮内の生理的発達に関してエリクソンは次のように述べている。「この子宮内であいついで起る発達に関して、各器官にはそれぞれの発生する時期がある。この時間的因子はその器官の発生の場所と同様に重要である。たとえば、眼がある一定の時期に発生しない場合、それは十分にしかるべき機能を果たすことができなくなる。なぜならば、他の部位の急激な発達の時期が到来してしまい、……遅ればせながら眼の働きが現われようとする傾向を抑制しがちになるからである。……もし発達の『適切な速度』と『正常な順序』が妨げられると、結果は、『高度の変形による奇形』か『欠損による異常』を招来する⁽¹²⁾。」

つまりエリクソンは、このような生理学的・身体的発達の様態である「漸成原理」というものが、人間の精神はその身体の発達と不可分に関連して発達していくと考えられる為に、人間の精神的発達にも当てはまる原理であると考えてるのである。したがって上述の引用からもわかるように、各身体器官がその「予定表」にそって正常な順序と適切な速度で発達していくのと同様に、人間の精神的発達もその生体としての人間がもつ「内的法則」に基づいた正常な順序と適切な速度で発達していくのであり、このことはまた、精神的発達においても、人生の中で人間が発達させていく精神的健康の各構成要素（これらはその時期の身体的発達と密接に結びつく）は、その発達にもっとも適した時期において獲得されねばならないという、一種の臨界期的性質を帯びているという事を意味しているのである。

II. 人間と環境との相互性

さて、エリクソンの発達理論におけるもう一つの基本的視座は、人間と環境との相互性 (reciprocity) の重視である。すなわち新生児は自らの内的法則に従って様々な“内因性”の行動を表出していくことは前述したが、この時、環境側が（エリクソンの場合、「環境」とは主として赤ん坊の周囲の人々をさす）この新生児の行動（微笑なども含む広義の意味における行動）をうまく受けとめていく事が重要となるのである。具体的には、赤ん坊が自らの生存の為にっぱいを欲しがると、主としてその母親が敏感に赤ん坊の欲求を感じとって授乳行為をしたり、また赤ん坊が泣き出せば母親は赤ん坊の所に行って抱き上げたりあやしたりするなどの一連の諸行動を意味している。そしてこれらの人間（赤ん坊）と環境（赤ん坊の周囲の人々、主として母親）との相互作用 (interaction) がうまく行なわれると、このことは情緒的にも“満足感”というよい影響を赤ん坊と母親の相方に対して与えることになるのである。そしてこれらの成功裡になされる赤ん坊と環境との相互作用が、後に詳述するエリクソンの有名な「図表 chart」の基本となるのである。

さてエリクソンが赤ん坊と環境とのこのような相互性に関して述べる時、必ず次のことが重要となってくる。それは環境は赤ん坊との相互作用において、環境が生体としてもつ（前述したように「環境」とは赤ん坊の周囲の人々をさしている）それ自身の内的法則（本能的パターン）と、その環境を取り巻く社会や文化（伝統的パターン⁽¹⁴⁾）の相方によって導かれる事が大切だという指摘である。このことはつまり、この環境側としての母親が赤ん坊に対して授乳行為をする時、当然そこには両者間に相互作用が起こるのだが、この時彼女は「赤ん坊が泣き出すとすぐに赤ん坊のところに走り寄る、そしておっぱいを与える」というすべての動物がもつ母親としての本能と同時に、彼女が育ったその社会や文化の伝統や慣習に導かれ

て授乳行為を行なっているという事を意味している。

次にエリクソンが度々行なったアメリカインディアンに関する野外調査の諸研究に基づいて、このことをさらに考察してみよう。エリクソンが1937年に調査を行なった「大草原をゆく狩人」⁽¹⁵⁾である狩猟部族のスー族においては、計画的授乳というものはなく、赤ん坊は泣く度にすぐ母親から無制限に授乳を許され、またこの母乳による授乳期間は平均3年間という長期にわたっていた。このことはスー族の母親たちの本能にしたがった授乳行為というものが、彼らの文化社会的環境によっていかに影響を受けているかを示していよう。(エリクソンは、訪門者がスー族の持ち物や宝物を少しでも賞賛しようものなら、彼らはいつでもそれらをすぐ気前よく訪門者に与えてしまう事などにみられるようなスー族の成人たちに特徴的な顕著な寛容性は、「母親の無制限の授乳がもたらす栄養と安心感を享受する乳児の特権にそれを養う最初の基礎をおいているようである」⁽¹⁶⁾と述べている) また太平洋岸で漁労とどんぐり採集を生業とし、「鮭のくる河に沿って住む漁民」⁽¹⁷⁾であるユーロク族における授乳行為では、新生児は生後10日間は貝がらからクルミのスープを飲まされるだけで母乳は与えられない。そして11日目からスー族と同様、頻繁で無制限な授乳活動が開始されるのであるが、生後6ヶ月頃に突然明確な離乳の時期がやってくる。この離乳はたいへん厳しいもので、「離乳は『母乳を忘れること』とよばれ、必要ならば、離乳を強行するために最初の一年の終り頃に母親が2、3日間どこかへ行ってしまふことさえある」⁽¹⁸⁾とエリクソンは述べている。(そしてこの背景には母親がもと通りの夫婦生活に戻れるよう、ユーロク族の子どもができるだけ早く母親から離れて自律するように奨励されるという、ユーロク族の文化社会的な要請が存在しているのである)

このように「授乳行為」という赤ん坊と環境との相互作用を示すものを一つとってみても、それは環境側からみる時、環境自身が生得的にもつ内的法則(本能パターン)と、その環境が育った社会や文化がいかなる授乳

行為を伝統的に保持しているかという文化社会的状況（伝統パターン）とによって、いかに強く導れ影響を受けているかが理解できよう。したがってこのように文化社会的に導かれた環境が赤ん坊と接する時には、必然的に環境の重要人物でてる両親において、「自分たちがやっていることには意味があるという深い確信、それもほとんど身体的ともいえるほどの確信を、子どもに示すこと⁽¹⁹⁾」が必要であり、ひいては、両親自身が自分がその地域社会において「信ずるに足る人間であるという確固たる感覚（a firm sense of personal trustworthiness⁽²⁰⁾）」をもっていなければならないとエリクソンは強調しているのである。

さて、これまでは主として母親に代表される環境側からの赤ん坊に対する働きかけ（相互作用）の質についてみてきたのだが、この環境側も実のところ、この赤ん坊との相互作用をとおして発達していくのだという事を忘れてはならないだろう。エリクソンはこのことに関して次のように語っている。

「赤ん坊の存在そのものが、家族全員の内的・外的な生活全般に対して、一貫した永続的な支配を及ぼすことになる。家族メンバーは自己の存在を赤ん坊に同調させるように強制されるために、個人としても集団としても否応なしに成長しなければならなくなるからである。家族全員が赤ん坊を統制し、育てると言われるが、逆に赤ん坊が家族全員を統制し、育てるという言い方もまた正しい。家族というものは、赤ん坊に育てられることによってのみ赤ん坊を育てることができる。」⁽²¹⁾

すなわち自らの内的法則にしたがって発達する赤ん坊と交わることによって、生体としての環境も出産や育児を経験していくわけだが、このことは同時に環境の内的法則にしたがって環境自体も発達していくことを意味しているのである。以上のことをエリクソンは、「人間と環境との相互性」という言葉で表わしたが、これは彼の発達理論を理解するうえでの重要概念となっているのである。

III. 図表とワークシートに関する基本的枠組

エリクソンは、身体が有機体として予め決定されている予定表にしたがって発達していくように、人間の精神も生得的な内的法則によって決定されている各発達段階にそって「漸成的に」発達していくと考えている事については前述したとおりである。そしてエリクソンは、人間がその生涯で発達させていく精神的発達の項目を、それらの発達が優勢になる順に 8 対指摘し、これらが各発達段階においてどのように展開していくのかを便宜的に「図表 chart」として表わした。次にこの「図表」を示す。(第 1 表参照)⁽²²⁾

第 1 表 図 表 (chart)

I 乳 児 期	信 頼 対 不 信							
II 早期児童期		自 律 性 対 恥・疑惑						
III 遊 戯 期			主 導 性 対 罪 惡 感					
IV 学 齡 期				勤 勉 性 対 劣 等 感				
V 青 年 期					同 一 性 対 同 一 性 拡 散			
VI 初期成人期						親 密 さ 対 孤 独		
VII 成 人 期							生 殖 性 対 自 己 耽 溺	
VIII 成 熟 期								完 全 性 対 嫌 惡・絶 望

第2表 ワークシート (worksheet)

	A 心理社会的危機 Psychosocial Crises	B 意味ある関係の範囲 Radius of Significant Relations	C 心理・社会的様式 Psychosocial Modalities	D 心理的段階 Psychosexual Stages	E 自己の強さの基本 Virtue
I 乳児期 Infancy	信頼—不信 Trust—Mistrust	母親 母親的人物	得る・お返しに 与える to get・to give in return	口唇期 感覚—運動的 (取り入れるモード)	希望 Hope
II 早期児童期 Early Childhood	自律性—恥・疑惑 Autonomy— Shame, Doubt	両親 両親的人物	保持する・手離す to hold (on)・ to let (go)	肛門—尿道的 筋肉 (保持—排泄的)	意志 Willpower
III 遊戯期 Play Age	主導性—罪悪感 Initiative—Guilt	基本的家族	思い通りにする (=追いかける) まねをする(=遊ぶ)	幼児—性器的 運動・移動 侵入—包含的	目的 Purpose
IV 学齢期 School Age	勤勉性—劣等感 Industry— Inferiority	近隣・学校	物を作る (=完成する) 物を一緒に作る	“潜伏期”	能力 Competence
V 青年期 Adolescence	同一性—同一性拡散 Identity—Identity Diffusion	仲間集団 モデルとなる指導者	自分自身である事 自分自身である事 の共有	思春期	忠誠 Fidelity
VI 初期成人期 Young Adult	親密さ—孤独 Intimacy— Isolation	友情・性・競争・協 力における同伴者	他者の中に自分自身 を失い、そして見失 出す	性器期	愛 Love
VII 成人期 Adulthood	生殖性—自己耽溺 Generativity— Self-Absorption	分担された 勤労と家事	世話をする		世話 Care
VIII 成熟期 Mature Age	完全性—嫌悪・絶望 Integrity—disgust despair	人類 わが種族 “My Kind”	今まで存在してきた 事によって存在する こと存在しなくな る事に直面する事		英知 Wisdom

さらにエリクソンは人間と環境との相互作用の具体的内容を各発達段階ごとに示した「ワークシート worksheet」とよばれる表を作成した。次のとおりである。⁽²³⁾ (第2表参照)

本論文では枚数の関係上、「I 乳児期」に絞って考察しようと思う。そうすることによって、この「ワークシート」や「図表」全体に貫かれているエリクソンの基本的な考え方を具体的に理解するための枠組を提供できると思うからである。

さて、人間の内的法則にしたがって精神は漸成的に発達していくのだが、この時エリクソンは精神的発達の諸項目の先駆体はすべて乳児期から存在しているのだが、時間的推移にしたがって分化発展していく (a progression through time of a differentiation of parts)⁽²⁴⁾と考えている。しかしある発達段階において特定の項目が優勢になるのは、その時期に赤ん坊が、

- ① 主としてどのような環境 (ワークシートの「B 有意味な関係の範囲」に該当) と、
- ② いかなる相互作用を経験する (ワークシートの「C 心理・社会的様式」) のか
- ③ そしてその相互作用において、赤ん坊の身体の中の部分がフロイトの性的発達理論では重要 (ワークシートの「D 心理性的段階」) となっているのか

などによって決定されると考えていると思われる。次に I の乳児期について、これらの点について考察してみたいと思う。

エリクソンは乳児期における精神的発達の項目として、「基本的信頼——基本的不信」という一対を示している。そしてこの時期はフロイトの心理性的段階としては「口唇期」(口唇や感覚器官で活発に外界と相互作用する時期)⁽²⁵⁾にあたり、赤ん坊は母親や母親的な人との相互作用をとおして「得る to get, お返しに与える to give in return (『お返しに与える』とは、

たとえば周囲の人々があやせば赤ん坊が微笑みを返す事などを意味する) という最初の「対人関係の型 personal patterns (心理・社会的様式)⁽²⁶⁾」を学ぶのである。さらに、前述した①～③についてこの乳児期をあてはめると、「基本的信頼—基本的不信」という項目がこの時期に優勢になるのは、

- ① 主として母親と
- ② 「得る」「お返しに与える」という相互作用を経験し、
- ③ その相互作用において、主として赤ん坊の口唇が重要な身体部位 (body zone) となる事

などによって決定されと考えられるのである。ではさらに具体的にみていこう。

生後一年間の乳児を観察すると、生得的な吸啜反応（“内因性”の行動パターン）によって、赤ん坊はその口唇をとおして重要な環境である母親と交流していることがわかる。そしてこの時の赤ん坊の主な行動は、この時期の赤ん坊の重要な身体部位である口唇をとおして、母親のお乳を「得る」ことである。つまり乳児期において赤ん坊は、授乳という母親との相互作用をとおして、人間の対人関係のもっとも基本型である「得る to get」という様式 (mode) を身につけるのである。さらに赤ん坊が自分の生命を維持するために必要な食物（母乳）をいつでも必要な時に母親から与えられるというこの経験が、赤ん坊の中に満足感と母親に代表される外界に対する基本的信頼感を生み出す基礎になる、とエリクソンは考えるのである。しかしエリクソンはこの時同時に、外界には母親の乳房に代表されるような赤ん坊にとって“善いもの”ばかりではなく、“気持ちの悪いもの”“いやなもの”も存在するという事を経験することによって、ある程度の「基本的不信感」を感じることを学ぶ事も大切だと主張している⁽²⁷⁾。この意味において、エリクソンは乳児期に獲得すべき精神的健康の項目を単に「基本的信頼」としてのみ把握せず、信頼と不信との間で揺れ動きながら、そのような一種の危機的状況を経て、この段階の終わりには「基本的

信頼と基本的不信」に関する一定のバランス、永続的な解決パターンが赤ん坊の中で確立される事が必要だとしているのである。そしてこの際、基本的信頼が基本的不信を上回るバランス(比率、割合、balance, ratio)で確立されている事が重要だと指摘している。⁽²⁸⁾ さらにエリクソンはこの両者のバランス、またこれを生み出す赤ん坊と環境との相互作用においても、いかにその文化社会が影響を与えているかという事を強調している。(それゆえワークシートにおいて、「A 心理社会的危機」「C 心理・社会的様式」とよんでいる)つまり、その社会でうまくやっている母親との交流をとおして、乳児はその社会特有のやり方で「得る」という対人関係の基礎的様式を学ぶことになる。このため当然この母親との相互作用から生まれてくる「基本的信頼—基本的不信」という精神的発達の項目に関しても、その社会で容認されているこれら双方の適切なバランス(割合)というものが、赤ん坊の中で獲得されるバランスに対して重大な影響を及ぼすことになるのである。

さて以上述べてきた事を整理する意味で、エヴァンズ博士の「口唇—感覚的段階からあらわれてくる基本的信頼(basic trust)と基本的不信(basic mistrust)とは、⁽²⁹⁾ いったい何を意味しているのか」という質問に対して、エリクソン自ら答えている箇所があるので、次にそれを引用してみる。

「口唇性つまり、口に集中する経験の複^{コンプレックス}合体は、食事を与え、安心させ、抱擁したり、温かくしてくれる母親との関係において、発達します。私はこの発達の第一段階を口唇感覚的および筋肉運動的な段階と名づけています。この段階の行動の基本様式は取り入れ(incorporative mode)です。われわれが人生において最初に学ぶ事柄は、取り入れるということです。人間は、口唇ばかりでなく、他の諸感覚でもまた取り入れるのです。子どもは、目でさえ『取り入れ』ようとし、ついで記憶し、さらに、外部にあるものをあたかもすでに自分の内部にあるかのようにみようとするのです。

そこで、この段階で学習しなければならない基本的な心理—社会的な態度は、いわば、子どもが自分の母親の姿を通して自分の世界を信頼できるようになることであります。つまり、母親はすぐ戻ってきてきつと食事を与えてくれること、母親は適当な時間に適量の適切な物を与えてくれること、そして、自分が不安になったとき、母親はきつと来てくれて、不安をなくしてくれること、等々のことをいうのです。……さらにいえば、文化、階層および人種の差異によって、母親たちは異なった方式で、この「信頼すること」を教えなければなりません。そうしてこそはじめて、それは、自分たちの文化的な様式に適合した形になるのです。しかし、不信を感じずることを学ぶことも同様に重要なことです。これこそ私が、『基本的信頼 対 基本的不信』という言い方をする理由なのです。ですから、私が考えていることに注意を払わないで、これらの諸段階が引用されるとき、そんな人びとは、しばしば不信、疑惑、恥などすべて大変よろしくない『否定的』事項を取り去って、エリクソン学説による達成尺度を作成しようとしします。実際には、信頼と不信とが一定の割合で基本的な社会的態度に含まれることこそ、決定的要因になるのです。⁽³⁰⁾

さらにエリクソンは、この心理社会的危機である信頼と不信との間に一定の解決を見出す事によって、人間の強さの基本の一つである「希望 Hope」というものが生み出されると考えている。このことはたとえば、赤ん坊の視界から突然母親が消えても、この母親に対する基本的信頼感が獲得されていると、母親はまた必ず戻ってきて赤ん坊に満足感を与えてくれるだろうというような“未来に対する信頼感や希望”が赤ん坊の中に芽ばえてくることを意味している。すなわちこの希望とは、「将来を信じて待つことができる能力 ⁽³¹⁾ability to wait」を意味するが、これは、赤ん坊が外界に対して不信よりも基本的信頼感をより多く永続的に獲得している事によってもたらされるのである。

以上乳児期に関してみてきた事を、図表とワークシートの全体的流れから確認してみよう。

まずエリクソンは、人間の精神的発達というものを、「心理社会的危機」に関して、それらが優勢となる各発達段階において、ある永続的な解決を漸次見い出していく事として把握している。そしてその解決は、フロイトの精神分析理論において各時期に重要となる身体部位を中心として（心理的段階）、その時期の「有意味な関係の範囲」に代表される環境との相互作用をとおして、「心理・社会的様式」を学んでいく過程においてなされるとしている。また、この「心理社会的危機」がうまく解決される事によって、各時期における人間の「自我の強さの基本」が生み出されると考えているのである。

さらに図表からは、生涯をつうじてその時期に特に優勢となる「心理社会的危機」に対して一定の解決を漸成的に蓄積していく事により、最終的に「VIIIの成熟期」において、それまでの諸解決のすべてがもっともよく統合されると主張しているのである。

図表やワークシートに関する基本的考え方や枠組は、だいたい以上のようなであると考えられよう。しかしその基本的メカニズムはそうであっても、さらに第二段階の早期児童期以降における各発達段階についての具体的内容の吟味に関しては、様々な問題もあると思う。そしてそれは多くの場合、エリクソンがその根底にフロイトの性的発達理論を据えているという事実と大いに関係があると思われる。けれども今回は、エリクソンの図表やワークシートの中で表現されている、彼の人間の精神発達に関するもっとも基本的な考え方の枠組を示すことに届めておきたいと思う。

結 語

エリクソンの発達理論における基本的視座を把握しようと試みてきたが、エリクソンがある面、直観的に洞察していることを具体的に理解して

いくことはかなり骨がおれたと言ってさしつかえない。このエリクソン独特の難解さは多くの研究者が経験していると思われるが、その主な要因として次の2点が考えられると思う。

それは第1にエリクソンが元来彫刻と絵画に携わる芸術家であり、彼のアイデンティティを中心とする一連の理論が芸術家から心理学者へ、ドイツからアメリカへと変遷していった彼自身の“生きざま（自分史）”の中から生まれてきていること、そして第2にフロイトの精神分析理論をその根底に強くもっていることである。エリクソンは自らの研究態度について次のように述べている。「私は美術の分野から心理学へと転じてきた。このことは、読者がむしろ事実や概念を指摘してほしいと思うところを私がしばしば文脈や背景を描いていることの説明にはなるかもしれない。たとえばそれが正当化されないまでも、私が自分が言わんとすることを理論的ではなく、象徴的な描写を用いて述べているが、それは私自身のもつ素質からくる必然性を役立てた⁽³²⁾までである。」さらに彼はその主著「幼児期と社会」に関して、「すなわち、彼（精神分析家）は観察する対象に自ら影響を与えて、自分自身が研究している歴史的過程の中に入り、その一部分となる。治療者として、彼は被観察者に対する自分自身の反応を意識していなければならない。つまり観察者としての彼の『反応式 equation』ともいうべき主観的解釈が実は彼の観察の道具そのものになるからである。この意味で、本書は主観的な書であり、概念的探求の道程である。」⁽³³⁾と語っている。以上のようにみてくると、エリクソンの理論独特の難解さや曖昧さこそ彼の理論の持ち味であり、これらを明確にしていく事が返ってエリクソン本来の姿から隔離していく危険性をもつかもしいと思える。しかしながら、これらの曖昧さを少しでもなくし、エリクソンの理論の一つ一つについて明確化していく事がやはり大切だと思うのである。

エリクソンの理論を難解にしている第2の要因として、彼の人間の精神的発達の理論がその基礎としてフロイト精神分析の性的発達理論を据えて

いる点は前述したとおりである。フロイトの理論では人間の発達について、その性的エネルギーであるリビドー (libido) の成熟を重視している。そしてそれは、乳児期は身体部位である口唇に、前期幼児期は肛門部位に、そして後期幼児期は性器に各々備給 (カセクト) されていくと仮定している。これは神経生理学者で医師であったフロイトが、科学的客観的に人間の病理をとらえようとし、19世紀の物理学の影響を受けて、「性機能は、身体の化学的性質から生ずる興奮を量的に把握できるような領域である」⁽³⁴⁾との考えから提唱した理論である。しかしながらこの客観性の有無はともかくとして、このフロイトの性的理論そのものの理解が特に日本人にとっては困難であることが、エリクソンを理解する上に大きな障壁となっている事は明らかだと思われる。

さて、最後にエリクソンが人間の精神的発達ということを、人間がその社会でいかに有能な意味のある人物となっていくかという側面を重視して、つまり「人間の自我が、各段階で社会的に意味のある相互作用をとおして徐々に『強さ』を獲得していく過程」としてとらえている点について述べておきたいと思う。エリクソンはこのような人間精神の発達観の前提として、「社会の健全さ」を重視している。つまり、「人間は成長するにつれてその社会の一員として自信をもち、また社会の健全さの存在を自らの内に確信するようになっていく」という一種の理想主義、アメリカン・ドリーム的な楽観主義の側面が、エリクソンにはみられると思うのである。彼はこの「社会の健全さ」に関して次のように語っている。「…また、成人期の支配的なイメージから乳児期の初期にまで及ぶ達成の約束や、社会的健全さの有形の証拠によって、児童期と青年期の各段階で、増大する自我の強さの観念を作り出す成就の約束がなければ、この自我同一性は完成されることはないのである。」⁽³⁵⁾(傍点筆者) さらに「同一性を導く社会的価値 social value を求めていくと、貴族政治 aristocracy の問題に直面することになる。できるだけ広い意味にとれば、この意味は最良の人びとが

支配し、その支配が人びとに最良をもたらす体制である。シニカルになったり無気力になったりして自らを失わない為には、同一性をさがし求める若者は、どこかで、成功する人々はそれによって最良であることの責任 obligation, つまり 国民の理想を体現する責任を担っているということを自らを確信させねばならない。」⁽³⁶⁾

このような社会の健全さと、人間の強さの獲得を重んじるエリクソンの発達理論は、やはり西欧的そして特にアメリカ的だと改めて感じると共に、この理論が日本においてどこまで適応できるのか、さらに現代の人間がエリクソンのように社会の健全さを果たして確信できるのか、また、そもそも社会よりも個人志向を強くもつ人々が多い現代において、「社会」という概念を重視するエリクソンの理論がどこまで理解されるのかなどに関して多くの疑問が残るのである。いづれにせよエリクソンの理論は、その一部を切り取ってきて応用することはできても、その全体像を把握することが極めて困難な理論だと思われるのである。

主要参考文献

この小論は、主に以下の2冊の原著及びそれぞれの訳書計4冊を中心として作成された。「注釈」における各文献の略語を各々の最後に記している。

・ Erik H. Erikson, *Identity and the Life Cycle*, International Universities Press, New York, 1959. (略 Id)

・ Erik H. Erikson, *Childhood and Society*, W. W. Norton & Company Inc., New York, 1950. (略 Ch)

・ E. H. エリクソン：自我同一性。小此木啓吾(編訳)，誠信書房，1973. (略 Gi)

・ E. H. エリクソン：幼児期と社会Ⅰ。仁科弥生(訳)，みすず書房，1977.

(略 Yo)

注 釈

各文献の略語記号は、主要参考文献で記したとおりである。

- (1) 鑪幹八郎・名島潤慈・山本力：自我同一性に関する研究の現況—日本における研究の展望—。広島大学教育学部紀要，27；144，1978.
- (2) Id, P. 119, 1959. (Gi, P. 157, 1973.)
- (3) Id, P. 52, 1959.
- (4) 同 上
- (5) 発達とは本来連続的なものであり，発達段階は明確な形で存在しているのではない。しかし身体的発達はその速度の変化によって通常いくつかの期間に区分することができる。この期間を発達段階としてとらえ，各期間はあるまとまりのある性質をもつと考えられている。
- (6) エンジェル博士の基本的立場はオーソドックスな Freudian であるが，エリクソン自我心理学にも近い。より生物学的・生理学的側面を重視している。
- (7) 具体的な内因性の行動パターンとしては，新生児が初めて口に乳房を与えられると無条件にその乳首に吸いつくというパターン，性的に成熟すると異性と交わるパターン，さらに子どもを産み育てるというパターンなどが考えられよう。
- (8) G. L. エンジェル：心身の力動的発達 小此木啓吾・北田譲之介・馬場謙一（編），；19，岩崎学術出版社，1976.
- (9) 漸成説とは「精神医学辞典」（弘文堂，1975）によると次のとおりである。
「生物学で，個体の成長は卵の中に各部分がはじめから存在しているのではなく，漸次発達分化していくという学説。……漸成または発達分化とは，エリクソンによると，生れながらの諸素因が特定の時期，速度，および他とのつながりの中で，その働きをあらわす発達の様態の記述図式である。」（同上 P 402）
- (10) Id, P. 52, 1959.
- (11) Ch, P. 65, 1977. (Yo, P. 76, 1977.)
- (12) Ch, P. 65-66, 1950. (Yo, P. 77, 1977.)
- (13) エリクソンのいう「予定表」と「内的法則」という用語は，どちらも遺伝的に規定されているという意味において同義語であると考えられるが，「予定表」が主に身体的発達に関して用いられるのに対し，「内的法則」は主に精神的発達に関して使われていると思われる。
- (14) Id, P. 55, 1959. (Gi, P. 58, 1973.)
- (15) Yo, P. 137, 1977.
- (16) Yo, P. 169, 1977.
- (17) Yo, P. 208, 1977.

- (18) Yo, P. 221, 1977.
- (19) Id, P. 63, 1959. (Gi, P. 70, 1973.)
- (20) Id, P. 63, 1959. Ch, P. 249, 1950. (Yo, P. 320, 1977.)
- (21) Id, P. 55, 1959. (Gi, P. 58, 1973.)
- (22) この「図表」は Id, P. 120 (Gi, P. 158) の「図表」を基に作成されているが、この「図表」が完全な形で示されていない事を断っておく。より詳しい「図表」は、「V. 青年期」に関してこの時期にもっとも優勢となる「同一性 vs. 同一性拡散」の項目を中心として、I から IV の各段階におけるその先駆状態と VI における分化状態が縦に、またこの青年期における他の 7 対の諸項目の状態が横に記されているのである。これはエリクソンが人間の発達の中で、青年期をもっとも重視しているからである。したがってこの青年期における同一性に関して理解を試みることは、エリクソン研究にとって不可欠ではあるが、本論文ではその前段階として、まずエリクソンの発達観を貫く基本的枠組を考察することに絞っている。このため混乱を避けるため、この「図表」では青年期に関する諸項目を敢えて省いて載せている。
- (23) この「ワークシート」は、Id, P. 166 の “worksheet” (Gi, P. 216 の「展望図」) を基礎として、Ch, P. 274 (Yo, P. 353) に示されている「人間の基本的強さのリスト a blueprint of essential strengths」を参考に作成したものである。
- (24) Ch, P. 91, 1950. (Yo, P. 109, 1977.)
- (25) G. L. エンジェル：心身の力動的発達 小此木・北田・馬場(編)；12, 岩崎学術出版社, 1976.
- (26) Ch, P. 77, 1950. (Yo, P. 89, 1977.)
- (27) 「心身の力動的発達 (既出)」の中でエンジェル博士は、赤ん坊が自分の望むものを口にもってゆくが、自分の望まないものには固く口を閉じて拒否するか吐き出してしまうという事実から、赤ん坊の中に「判断 judgement」という概念が初めて発達しているのではないかと述べている。そしてこれは第 1 に乳児の内因的な発達パターン (endogenous development) に依っている事、第 2 にこの赤ん坊の行動様式が彼の中に「心的表象 psychic representation」を獲得し、外界とその中の対象物に対する彼自身の見方をつくり出しているのだということを強調している。(P. 58 参照)
- (28) Id, P. 63, 1959. (Gi, P. 70, 1973.)
- (29) R. I. エヴァンズ：エリクソンは語る——アイデンティティの心理学——岡堂哲雄・中國正身 (訳)；13, 新曜社, 1981.

- (30) 同上；15-16, 新曜社, 1981.
- (31) G. L. エンジェル；心身の力動的発達；53, 岩崎学術出版社, 1976.
- (32) Yo, P. 5, 1977.
ロバート・コールズ：エリク・H・エリクソンの研究 上 鑑幹八郎（監訳）；
165, ぺりかん社, 1980.
- (33) Yo, P. 5, 1977.
- (34) R. I. エヴァンズ：エリクソンは語る——アイデンティティの心理学——岡
堂・中園（訳）；14, 新曜社, 1981.
- (35) Ch, P. 246, 1950. (Yo, P. 316, 1977.)
- (36) Id, P. 94, 1959.

（この小論を作成するにあたり，立教大学文学部の村瀬孝雄教授から様々な有益な刺激を受けた事に対して感謝の意を表します）